東京薬科大学 薬学部 製薬学科卒、工学院大学 工学部 教職特別課程修了/
日野市立病院 薬剤部 薬剤師　1988 年 3 月 卒業　得田 保雄（高 40 期）

「病院薬剤師として働いて、そして卒業生として伝えたいこと」

●はじめに

立高生の皆さん、どの様な高校生活を送っているのでしょうか？将来の希望に胸を膨らませている人、心配で悩んでいる人など、色々いらっしゃると思います。でも大丈夫です。何事も自信を持って前に進んで下さい。こんな自分でも、どうにかやってきています。
今回、「先輩からの手紙」を書くにあたって、皆さんの現在の立高生活、将来のついての指南、反面教師になれば幸いです。

●病院薬剤師という仕事

今、私は病院薬剤師として勤務しています。一般に薬剤師といっても、調剤薬局で処方箋に基づいてお薬を渡しているイメージしかないかもしれません。しかし意外にも（？）薬剤師の仕事は多岐にわたっています。大まかに分けて①調剤薬局、ドラッグストア、医薬品卸での勤務②病院・診療所内での勤務③製薬会社の MR(医薬情報担当者。営業職)④製薬会社での研究、開発④官庁での勤務（厚生労働省、特許庁、麻薬取締官など)、保健所職員⑤大学教員、中学校・高等学校教員（理科)、薬剤師国家試験対策予備校の講師として勤務、等があります。今回は、今の自分の仕事、病院薬剤師について説明したいと思います。他の仕事について興味のある方は、是非、ネット等で調べてみて下さい。

病院薬剤師としての仕事は、主に調剤（入院・外来)、病棟業務に分かれます。
入院調剤は医師の処方箋に基づいて入院患者さんの内服薬・注射薬を調剤（そろえて）し監査（確認）して病棟に払い出します。基本、1 週間分ずつを調剤します。その中で、重複（同じ薬があるか)、相互作用等などをチェックして、必要があれば処方医に確認します。抗がん剤や IVH（中心静脈栄養）の調製（混ぜる）も行います。
外来調剤では検査薬や吸入薬の説明、医薬分業の流れで、院外に処方箋（外来処方の 9 割程度）も出しています。持参薬（患者さんが入院した時に持って来たお薬）の確認もします。今現在、後発医薬品（ジェネリック医薬品）が多々あり、薬の数・種類も多く細かい作業になっています。他、医師から薬についての問い合わせ等があり、その対応もします。
病棟業務は病棟で、入院患者の服薬指導（お薬の説明）や、入院したばかりの患者さんのところに出向いて（初回面談)、持って来たお薬（持参薬)、アレルギーの確認をして、主治医や看護師と情報共有をし、入院中の治療の支援をします。その他、当直業務（夜間の勤務。1 日中、薬剤師は常駐）もあります。

病院内の活動として、患者さん向けの糖尿病教室（糖尿病についての講義）などがあります。病院外では私は西東京糖尿病療養指導士として地域の糖尿病の啓蒙活動に参加して

います。毎年秋口にある糖尿病療養担当者のためのセミナーでは 1 日掛かりで、糖尿病に関係する講義などを担当します。他、医療の分野には、数多くの学会（勉強会）があり、多くの人達が、自主的に興味のある学会に参加しています。私は、毎年、日本糖尿病学会、日本アレルギー学会に参加しています。数日間に渡る学会では、研究発表・講演等のほか懇親会などで、他の施設の医療従事者（医師、薬剤師、看護師など）との交流があり自己啓発になります。
私事ですが、2017 年 11 月より網膜剥離になり、手術で 1 ヶ月に及ぶ入院と 1 ヶ月に渡る自宅療養を経験しました。普段、中々、入院する機会はないので、患者さんの気持ちが分かります。医療従事者として、入院などの経験は必要だと思います。

●立高時代

立高時代は行事がメインの活動をしていました。所属していた委員会等は、新入生歓迎会実行委員会、体育祭実行委員会、販売委員会で、2 年時の立高祭ではチーム団長をしていました。6 月のチーム結成式から始まって、今は無きキャンパスの準備（作製）を夏休みを通して行い、9 月初旬の水泳大会から始まり、演劇コンクール、文化祭、クライマックスの体育祭、ファイアーストームへと続きます。今から思い出しても、密度の高い行事が多かったように思います。チーム団長という立場上、広く浅く関わるという感じになってしまい、もっと積極的に参加するべきだったと後悔しています。その直後、頑張り過ぎた為か持病の喘息が悪化してしまい入院してしまったという落ちがありました。
当時は、喘息に対する有効な治療法（ガイドライン）が確立しておらず、随分、苦しい思いをした記憶があります。今は吸入薬を中心とした良い薬があり、重度の喘息においても治療（コントロール）は可能になっています。その時の経験が医療従事者を目指す強い動機にもなりました。

物心がついた時から、医学部を目指して立高に入学したのですが、肝心な勉強はさっぱりでした。志はあるのですが、結果が伴わない完全に空回りの状態でした。卒業後、河合塾立川校の 1 期生として入塾し、数年間粘ったのですが、願いが叶わず医学部を断念して薬学部に進学することになりました。今からの反省点としては、勉強にはコツがあり、早い時期に自分なりの勉強法を確立することが成功への道だと思います。今の立高は、学校からの手厚い受験のサポートがあり自分が高校生の時より恵まれている環境だと思います。

●大学時代

不本意ながら薬学部に入学したのですが、医療に携わることが出来るということで前向きに考えるようになりました。授業と実習（実験）はハードで恥ずかしながら留年も経験しました。でも普通に頑張れば、ストレート（留年することなく）で卒業することは可能です。当時の薬学部は 4 年制、今は 6 年制です。今現在、薬学部の数が新設によって倍に増えた分、国家試験が難しくなり、薬剤師養成数は抑制傾向になっています。

母校東京薬科大学は私立大学薬学部としては 1 番の歴史があり、広い人脈があります。
全国の薬剤師会のトップ、製薬会社の社長、病院の薬剤部長、調剤薬局の薬局長など卒業生が多数いて心強いです。
　大学以外では、八王子にある大学セミナーハウスの勉強会（色々なトピック）に参加して知識を深めました。その時の先生方との交流が今の自分を形成している側面があります。
他、塾講師でのアルバイトも経験しました。人にモノを教えることは難しく、自分がちゃんと理解していないと教えることは出来ません。貴重な経験で、大学では教職課程も受講し、中学校・高等学校教員（理科）一種免許状を取得しました。
薬科大を卒業し、薬剤師国家試験対策予備校に通い薬剤師免許を取得しました。

●卒業生として
　今、立高との関わりは、同窓会組織・紫芳会があります。全国に支部があり、今はアメリカ支部も立ち上がりました。活動内容ですが、定期的な会合では諸先輩方と世代を超えた交流、母校への支援があります。自分は勤務地の関係上、日野支部に属していて、この 5 月から事務局長という役職をいただきました。23 区大江戸紫芳会でも幹事になっています。
高 40 期の代議員としての活動もあり、頻繁に同窓生との交流があります。
　医療人として先輩方の恩恵も感じています。
石坂公成先生（中 39 期）：世界で初めてアレルギーの原因物質 IgE を発見した免疫学の世界的権威。
国内外の数々の賞を受賞。文化勲章受勲。
廣澤一成先生（高 9 期）：東京大学医科学研究所・第 21 代所長。国内最大規模の医学研究所で初代所長は、新千円札の肖像画に予定されている北里柴三郎。
唐澤祥人先生（高 13 期）：日本医師会・第 17 代会長。日本の医師会員の組織のトップ。初代会長は北里柴三郎。
等、枚挙にいとまがありません。卒業生として心強く誇りに思います。

●立高生の皆さんに伝えたいこと「回り道も良い」
　小さい時からの夢である、医師に結果なれませんでしたが、今、病院薬剤師として働いてきて薬剤師は中々、良い職業だと思っています。今の法律では医療行為は医師しか行えず、普段の業務で職権の壁を感じことも多いのですが、薬剤からの観点で医療に貢献出来ますし、ニーズもあります。例えば、人間の血圧は、数剤の薬でコントロール出来ます。
どんな資格でもそうですが、薬剤師の資格は取得してからがスタートです。
医学・薬学は日進月歩で、毎日が勉強の日々です。そして時ある毎に勉強不足を感じます。
　以上、今までの自分について徒然なるままに書いてきました。自分は、随分と色々回り道をしました。人生は全て思い通りにいくものではありません。目標に向かって真っ直ぐに進み続けることの出来る人生は少ないと思います。若い時に自分の思い通りにいかなく

て回り道することがあったとしても、その時に経験した色々なことが後になって役立つことも多いです。当時、同年齢の人達より遅れてしまっていると感じていましたが、今、気付いた時には、彼らに追いつき追い越していました。回り道の経験が役に立っているのです。今の立高生に望むことは、自分の置かれた環境に満足せず出来るだけ経験をし、その経験を何かに活かす努力をしてもらいたいです。

立高は、2018 年から SSH（スーパーサイエンスハイスクール）に指定され、2022 年からは都立初の理数科の設置も予定されています。キャッチフレーズ「立高は未来に向けて進化します」に相応しい高校側のバックアップがあります。この恵まれた環境の中で、自分の可能性を信じて、前に進んでもらいたいと思います。これからの立高の未来は現役立高生にかかっています。